

契丹瑟瑟儀の一解釈

今井 秀周

はじめに

『遼史』礼志には瑟瑟儀と呼ばれる契丹の祈雨儀式が載せられている。これは北アジア遊牧民族の祈雨儀式を伝えた珍しい記録の一つである。

もし早あれば、吉日を択びて瑟瑟儀を行ない、以て雨を祈る。期に前んじて百柱の天棚を置く。期に及んで、皇帝は奠を先帝の御容に致し、乃ち射柳す。皇帝、再射し、親王・宰執、次を以て各一射す。柳に中てし者は、柳に誌せし者の冠服を質とし、中てざる者は、冠服を以てこれを質とす。勝たざる者は、飲を勝者に進め、然るのち各その冠服を帰す。また翌日、柳を天棚の東南に植え、巫は酒醴・黍稗を以て植えし柳に薦め、これを祝す。皇帝・皇后、東方を祭る。畢れば、子弟、射柳す。皇族・国舅・羣臣の礼に与る者には、物を賜いて差あり。既に三日して雨ふれば、則ち敵烈麻都に馬四疋・衣四襲を賜う。否らざれば、則ち水を以てこれに沃ぐ。道宗の清寧元年、皇帝、射柳し訖るや、風師壇に詣りて、再拝す。

(卷四九、礼志一、吉儀)⁽¹⁾

瑟瑟儀は二日間にわたって行われたが、この第一日目には射柳というひとときを目立つ儀式があり、これがいかに雨と関係したかというところで先学の間に論議を呼んだ。

瀧川政次郎氏は、ここを瑟瑟儀の中心と捉えて、「水辺に生じる柳を見て水を連想するのは人間自然の感情である。契丹は呪力のある矢を射れば、柳の中に閉じこもっている雨の精が外に追い出されて雨がふると考えたのであろう」と解釈した。⁽²⁾

これに対し島田正郎氏は、「射柳はもともと競射であり、柳を射ることに特別な意義はない。競射の行なわれる時期がたまたま旱天に見舞われる折と一致したことから、古来行なわれた弓矢による清祓法と結びついて、結果として雨を乞うこととなった」と論じた。島田氏が弓射と雨を直接関係付けなかったのは興味深い解釈である。

ところが島田氏は後になってまた「弓矢で清祓する巫術的観念と武技としての射柳とが習合し、楊柳のもつ水性を引き出すというところから祈雨儀式としての瑟瑟儀が形成された」とも論じた。⁽³⁾ そうなると、瀧川氏の説とほとんど変わらないことになる。

このあと王承礼氏は、「瑟瑟儀の祈雨の部分には、第二日目に樹を植えて巫が祭った所であり、巫が樹に酒醴・黍稗を薦めたところには、農業の需求が反映している」という考えを示した。そして「第一日目の射柳は、中国の射礼が契丹に入ったものである」と解釈した。⁽⁴⁾王氏が二日目の儀式を瑟瑟儀の中心と考えたのは炯眼である。また儀式の各所に中国の儀礼文化が見られるとの指摘にも頷ける。しかし第一日の射柳を、そこまで中国風に解してよいであろうか。

いったい射柳は雨とどう関係したのか。また射柳や植柳にどのような

な意味があったのか。先学の研究には、まだ釈然としない所がある。

思うに、この瑟瑟儀という儀式は、はじめから射柳などの細部に注目すると、理解が難しくなるのではなからうか。まずは儀式全体を一つのものと捉えて、それから各部分の役割を検討する方がよいであろう。そこで拙稿では、そうした観点に立ち、北方諸民族のシャマニズム儀式にあった特徴の幾つかを手がかりにして、瑟瑟儀が雨を降らせた仕組みを解いてみようと思う。

一 植柳して天を祭る

周 契丹人の宗教がシャマニズムであったことは、あらためて言うまでもない。中国と交流を深めるにつれて契丹は仏教にも親しみ、遼の末にもなると、シャマニズムは仏教に圧倒されるようになった。⁽⁵⁾しかし遼朝廷は最後まで、伝統のシャマニズム祭祀である祭山儀を執行し、民間でも、動物犠牲を使用したシャマニズム儀式が続けられた。⁽⁶⁾

さて北方民族のシャマニズムでは古今を問わず、天を最高神として、太陽・山川・鬼神などさまざまな神が祭られた。その神々の多くは天上に在り、人々は天に向かつて祈った。中国の書物はそれを「祭天」と記録した。祭天儀式を司ったのは主にシャマンである。シャマンの魂は身体から抜け出して天上の神々と交流し、神々のお告げを得る。逆に神の方が降りてきて、シャマンの身体に乗り移る場合もある。人々はそのシャマンの言葉を聞き、それをもとに政治軍事はじめ、あらゆる問題の解決を図ったのである。

北方民族はこの祭天儀式のときに、樹木や木製の柱を立てた。瑟瑟

儀には、第二日目にシャマンが柳木を植えて立てたことが見えているが、察するに、これは祭天用の木柱であろう。

北方民族が樹木を植えて天を祭った記録は数多ある。遼の例をあげれば、国家最高の宗教祭である祭山儀がその代表である。祭山儀の記録は次章に載せるが、この祭山儀の祭場には君樹・群樹とよばれる多数の小樹木が立てられた。そして高位高官はこれに犠牲の肉を懸け、これに向かつて礼拝した。つまり君樹・群樹というのは、天上の神々の神位に外ならない。

契丹と同じように興安嶺を拠地とした鮮卑拓跋にも、樹木を植えて祭天した記録がある。

魏先之居幽都也、鑿石為祖宗之廟、於烏洛侯國西北、自後南遷、其地隔遠、真君中、烏落侯國、遣使朝獻、云石廟如故、民常祈請、有神驗焉、其歲、遣中書侍郎李敞、詣石室、告祭天地、以皇祖先妣配、祝曰、……敞等既祭、斬樺木立之、以置牲體而還、後所立樺木、生長成林、其民益神奉之、咸謂魏國感靈祇之庇也、石室南距代京、可四千余里、

〔魏書〕卷一〇八の一、礼志二

真君中というのは北魏太武帝の時である。烏洛侯の使が来朝して、拓跋がかつて興安嶺の北部に居たとき営んだ祖宗の石廟の現況を伝えた。⁽⁷⁾そこで太武帝は李敞らを派遣して石廟を祭らせた。その祭りのとき、李敞は祝文を捧げおわると、樺木を切って立て、犠牲を置いた。李敞の行なった立木と供犠は、シャマニズム儀礼に従ったものである。

その後樺木は生長して林を成したというから、樺木は枝葉を切った

だけの根付きの木であったと考えられる。現代の民族調査でも、根をそのままに枝だけ切り払った樺木を立てて儀式を行った例が見られている。⁸⁾ シヤマンは祭儀に先立って、そうした木を森から何本も運び出して祭場に立てる。そして儀式が始まると、シヤマンはその木の周りをぐるぐると回ったり、回りながら木の頂きまで攀じ登ったりする。それはシヤマンの魂が天に上って行く様を表現しているのである。⁹⁾ その儀式のとき立てられた木は、そのまま成長して林になることがあるという。

木を植えるのでなく、天然の立木に依って天を祭った記録もある。遼の例をあげれば、皇帝が親征するときの儀式にそれが見える。

皇帝親征儀、常以秋冬、応敵制変、或無時、将出師、必先告廟、乃立三神主祭之、曰先帝、曰道路、曰軍旅、刑青牛白馬、以祭天地、其祭、常依独樹、無独樹、即所舍而行之、

〔遼史〕卷五一、礼志三、軍儀

こうした告廟に始まって先帝・道路神・軍旅神そして天地を祭る形は、中国の儀礼の影響を受けているが、¹⁰⁾ しかし儀式の中心である天地の祭りは明らかに契丹のシヤマニズム儀式である。それが証拠に祭壇の祭壇には、独樹が選定された。独樹というのは平原にぼつりと立つ木である。天に向かって独りそそり立つ木に契丹は神秘を感じたのであろう。

また元朝を建てたモンゴル族には、樹木の周囲に集まって祭りを行ったという記録がある。

全モンゴル人とタイチウトは、オノン河のゴルゴナク河原に集まって、クトラを皇帝とした。モンゴル人の喜びは、踊り宴して楽しんで

だったのであった。クトラを皇帝に載いて、ゴルゴナクの生い茂る樹の周りをば、肋骨ほどに溝ができ、膝小僧までに泥地となるほどに、踊った。

〔元朝秘史〕卷一

ゴルゴナク河原は、オノン河の中流にあったようで、多くの精霊の宿る所としてモンゴル族の聖地の一つであったという。¹¹⁾

そして現在でも、平原に独立した樹木や叢林は、遊牧民達からシヤマンの森、トナカイの森などと呼ばれて神聖視され、祭場や墓地となっている。

生木ではなく、木を加工して作った祭壇、神位もある。

主な例をあげれば、女真の金朝が拜天礼のときに立てた祭壇は、一・五メートル程の高さの木架上に船状の盤を載せたもので、盤に食べ物置いて天神に薦めた。¹²⁾ のちに清代の女真が皇帝から庶民に至るまで用いた祭天の木杆は、この後継の祭具と考えられる。清代の木杆は高さが二・五メートル、上端を尖らせてあり、上から三分の一位の所に供肉などを盛る斗が設けられた。¹³⁾

またモンゴル高原やチベット高原にはオボとよばれる壇がある。近代その存立意義は変化し、あるいは忘却されてしまったが、これは古くこの地域に行われた祭天の祭壇と考えられる。¹⁴⁾ オボの形や規模は様々であるが、おおむね基部を石や土で築き、その上に沢山の灌木を挿し立てている。¹⁵⁾

このように北方民族の天の祭りには、かつて樹木や木柱を立てることが普遍的に行われた。そして今も一部の地域でそれが続いている。瑟瑟儀で柳の木を植え立てて巫が供え物をしたのは、これらと同じ情

景である。瑟瑟儀で植えられた柳の木は、幼木か成木か、また生木なのか枝を切り落とした木なのか、細部は分からないものの、これはきつと祭天の祭壇もしくは神位である。

植柳のあと東方を祭ったことも注目される。この儀式は、契丹の太陽崇拜から生まれたもので、祭天儀式の一種と言ってよい。契丹の太陽に対する信仰は天信仰に劣らず強く、遼の国家儀式の中には、拜日や祭東の儀を含んだものが少なくなかった。⁶⁶⁾瑟瑟儀は雨を乞うための儀式であるから、太陽神にも祈願するのは尤もなことである

要するに瑟瑟儀の第二日目は、木を立てる儀式と、東方を祭る儀式とで構成された祭天儀式と考えることができる。

なお以上述べたことの外、第二日目の各部については、次のように解釈する。

事前に設置された天棚というのは、仮設の棚つまり屋根型のテントであろう。百柱というから、これはかなり大きなものである。⁶⁷⁾この大型のテントは遊牧民式の神殿、宮殿と見てよいであろう。

柳を東南位置に植えたのは、太陽信仰に基づいたものである。太陽はシャマニズムの主要神であり、東南は冬至に太陽が昇る方角である。北方民族が常々希求する太陽の陽光はいったん弱まって、冬至を境に再び強くなる。そうした自然の推移の神秘をとらえて、祭壇の位置を決定したのである。⁶⁸⁾

瑟瑟儀で植柳祭天の儀式を司ったのは、敵烈麻都であった。敵烈麻都は国家儀式を掌握する敵烈麻都司の長官で、いわば遼朝の祭司である。⁶⁹⁾儀式後三日で雨が降ったとき、敵烈麻都に馬や衣が賜与されたの

はその為である。シャマニズムは本来、神霊と直接交流するシャマンの能力をもとに成立するものであるが、遼ではややシャマニズムの儀礼化が進み、遼の祭儀で最も力をもっていたのは祭司であった。シャマンは祭司のもとで働く呪術担当者であった。⁷⁰⁾

シャマンが祭壇に黍や稗を薦めたのは、中国の農耕生産と関係したものに違いない。⁷¹⁾ただし酒醴については遊牧民の習俗と解してもよいであろう。遊牧民が馬など家畜の乳から酒を造るのは日常のことだからである。

二 シャマニズム儀式の形式

次に第一日目についてである。祭天儀式では、儀式の始めから木柱を立てて神との交流を行うわけではない。シャマンは木柱を立てる前に様々な準備をしなければならない。そこで筆者は瑟瑟儀の第一日目を、その準備の日と見る。

北方民族のシャマニズムと聞くと、それは甚だ原始的であり、儀式といっても各々のシャマンが適当な形で行っていたと思っている人が少なくない。もし北方民族の文化は低いという先入観があったり、一部の記録しか見なかったりすると、そうした理解になるかもしれない。しかし近現代の民族誌や調査記録によれば、シャマニズム儀式にも、ほぼ一定した内容、形式があったことが分かる。⁷²⁾そして中国の古記録は、その内容、形式が古くからあったことを伝えている。⁷³⁾

近現代の多くの調査記録によれば、北方民族のシャマニズム儀式は、おおよそ次のように構成されている。

a. はじめにシャマンは身を清め祭場を清める。そして諸靈に助力を要請する。

b. つぎに動物犠牲を殺す。犠牲は神への供物であり、またシャマンの魂が天に上るときの乗り物にもなる。犠牲のほかに脯肉や酒、ミルクを供えることもある。

c. つぎにシャマンはダンスを始める。太鼓や鈴を鳴らし、呪歌、呪文を唱えながらトランス状態に入っていく。シャマンの中にはダンスをしないで静かに忘我する者もある。やがてシャマンの魂は身体から離れ、神のもとへ赴き、神と交流する。逆に神がシャマンの方へ来て、シャマンに乗り移る場合もある。そして必要な答えを神から得ると、シャマンは我に返る。

d. シャマンと儀式に集まった者達は皆で犠牲の肉を食す。神人共食である。これで儀式は終了する。

e. このあと娯楽行事が催されることがある。すべての儀式がこのように整った形式を持っているわけではない。中には簡略なものや雑多なものもある。一般民の家祭などは、ごく簡単なものであった。とはいえ地域、国家の重要な儀式になると、大概こうした形で行われたと言つてよい。

歴史記録は、もちろん調査記録ほど詳細ではないが、それでも幾つかの民族について、かなり具体的な記録を残している。ここには遼の祭山儀の記録を引いてみよう。祭山儀は既に述べたとおり遼朝最高の宗教祭である。

祭山儀、設天神・地祇位于木葉山、東郷、中立君樹、前植羣樹、以像朝班、又偶植二樹、以為神門、皇帝・皇后至、夷離畢具礼儀、牲

用赭白馬・玄牛・赤白羊、皆牡、僕臣曰旗鼓拽刺、殺牲、体制、懸之君樹、太巫以酒醑牲、礼官曰敵烈麻都、奏儀辦、皇帝服金文金冠、白綾袍、絳帶、懸魚、三山絳垂、飾犀玉刀錯、絡縫烏靴、皇后御絳味、絡縫紅袍、懸玉佩、双結帕、絡縫烏靴、皇帝・皇后御鞍馬、羣臣在南、命婦在北、服從各部旗幟之色以從、皇帝・皇后至君樹前下馬、升南壇御榻坐、羣臣・命婦分班、以次入就位、合班拜訖、復位、皇帝・皇后詣天神・地祇位、致奠、閤門使誦祝訖、復位坐、北府宰相及惕隱、以次致奠于君樹、徧及羣樹、樂作、羣臣・命婦退、皇帝率孟父・仲父・季父之族、三匝神門樹、余族七匝、皇帝・皇后再拜、在位者皆再拜、上香、再拜如初、皇帝・皇后升壇、御龍文方茵坐、再聲警、詣祭東所、羣臣・命婦從、班列如初、巫衣白衣、惕隱以素巾拜而冠之、巫三致辭、每致辭、皇帝・皇后一拜、在位者皆一拜、皇帝・皇后各拳酒二爵、肉二器、再奠、大臣・命婦右持酒、左持肉各一器、少後立、一奠、命惕隱東向擲之、皇帝・皇后六拜、在位者皆六拜、皇帝・皇后復位坐、命中丞奉茶果・餅餌各二器、奠于天神・地祇位、執事郎君二十人持福酒・胙肉、詣皇帝・皇后前、太巫奠醑訖、皇帝・皇后再拜、在位者皆再拜、皇帝・皇后一拜、飲福、受胙、復位坐、在位者以次飲、皇帝・皇后率羣臣復班位、再拜、聲蹕、一拜退、

この祭山儀の記録を要約すると――、
〔遼史〕卷四九、礼志一

B. まず始めに犠牲が屠られ、神位に供えられた。

C. 次が儀式の中心であり、天神地祇および太陽神が祭られた。この間皇帝、皇后はじめ群臣、命婦らは幾度も奠拜をくりかえし、巫す

なわちシャマンが祝文を読み上げた。

D. 最後に参加者に福酒と胙肉がふるまわれて儀式は終了。

E. この後ひきつづいて、大射柳とよばれる弓射大会が催された。
——という形になっている。

祭山儀は中国風に裝飾されているが、本質はシャマニズム儀式である。儀式の進行順序は、前掲基本形式のとおりになっている。BからEは、bからeにあたる。aについては、祭山儀の記録には省かれて
いると考える。これだけ大規模な儀式になると、中心儀式の何日も前から何回にもわたって準備の儀式が行われるのが普通である。

さてそこで瑟瑟儀の次第を見てみよう。

周 ・瑟瑟儀の第一日目には、先帝の御容への奠拝と、射柳が行なわれた。
秀 ・そして二日目には柳木を立て、シャマンが呪儀を行ない、東方を祭
井 り、そのあとまた射柳が行われた。

今 記述は甚だ簡略であるが、これを右にあげたシャマニズム儀式の基
本形と比べると、儀式の主要要素は順序どおりにほぼそろっている。
二日目に柳木を立て東方を祭ったのはcに当たる。このあとの射柳は
eである。祭天の前には必ず供犠をし、後には犠牲の肉を食するが、
このbとdは記録から省略されている。祭天儀式に必ず伴う部分だか
らであろう。bからdにかけては、祭天儀式の中心部である。そうし
てみると、第一日目はそれに先立つ準備の儀式aに当ることになるで
あろう。中心部を本祭と称すれば、準備の部分は前祭と言えようか。

三 前祭での祭祖と清祓

前祭における御容への奠拝と射柳は、aの表現でいえば、諸霊への
助力の要請と祭場などの清めということになる。

先帝の御容というのは、先代皇帝の彫刻彩色された像のことであ
る。宋の王易が遼に使いしたとき、柴冊儀とよばれる尊号献上式を見
て、これを記録したものがあつた。

……先望日四拜、次拜七祖殿、次拜木葉山神、次拜金神、次拜赤娘
子、次拜七祖眷属、次上柴龍受冊、次入黒龍殿受賀、……七祖者、

太宗・世宗・穆宗・景宗・聖宗・興宗也、……木其形彫彩裝、常時
於木葉山、廟内安置、每一親戎主、行柴冊礼時、於廟内取來作儀注、

〔説郭〕弓第五六所収『燕北録』

先帝の像は、普段は契丹の聖地である木葉山に安置され、様々な儀
式が行われる度に、その祭場に運ばれていたという。

このように先帝の像を拝するのは、契丹の祖先崇拜にもとづくもの
であり、祖先に神佑援助を要請したものと考えられる。祖先崇拜は契
丹に限らず北方民族に特有の信仰であつた。彼らは木や家畜の毛で祖
先の神像を作り、常にテントの奥など身近な場所に置いて祭つた。祖
先神とは、漠然と先祖のすべてを指すこともあるが、民族の始祖や英
雄であることが多い。遼朝の場合は右にあるように主に先代の皇帝
で、その像を大國の儀礼に相応しい規模に作つて祭つたわけである。

なお先帝の像への奠拝は、瑟瑟儀以外にも幾つかの儀式中で見られ
るが、儀式によってその行われる位置が違つている。これは各儀式の
目的の違いなどによるものであろう。瑟瑟儀は雨を天上の神に祈る

シャマニズム儀式であるから、奠拝の位置は、祭天儀式の基本形に従って、前祭の位置にあった。もしかすると祭山儀でも、祭儀に至る準備の中で、先帝への奠拝が行われた可能性はある。

第一日目の射柳を、祭場などの清めの行為と解するには、契丹が弓射に清祓の力があると信じていたことを確かめる必要があるが、それは彼らが行った射鬼箭に明らかであろう。

射鬼箭というのは鬼箭を射る呪術で、軍事儀式のときや処刑の一方法として用いられたものである。²⁸⁾『遼史』礼志に、

出師以死囚、還師以一課者、植柱縛其上、于所向之方乱射之、矢集如蝟、謂之射鬼箭、

〔遼史〕卷五一、礼志三、軍儀

とあり、『遼史』国語解に、

射鬼箭、凡帝親征、服介冑、祭諸先帝、出則取死囚一人、置所向之方、乱矢射之、名射鬼箭、以祓不祥、及班師、則射所俘、後因為刑法之用、

〔遼史〕卷一一六、太祖紀の項²⁹⁾

とある。契丹は出師の際には死囚囚を、班師のときには敵の間諜を、これから軍が進む方角に立てた柱に縛り付け、そして一斉に矢を射かけて殺した。これから進む方向を射るといのは、敵を呪い、また邪気を祓ったのである。

また太祖紀に見える鬼箭には、その目的が厭禳と書かれている。

(七年四月)己卯、次彌里、問諸弟面木葉山射鬼箭厭禳、乃執叛人解里、向彼亦以其法厭之、

〔遼史〕卷一、太祖紀上

太祖の初め、皇弟らが次々と反乱を起こしたときのことである。太祖は彼らが木葉山に向かつて鬼箭をいたことを知ると、謀反人の一人である解里を捕らえて同じ方法で厭禳を行なった。木葉山は契丹の聖地であり、太祖の政治軍事の要衝である。その木葉山を射たというのは、太祖を呪ったことに外ならない。

このように弓矢で清祓厭禳を行うのは世界に広く見られることで、色々な方法が知られている。矢を空中に向けて放つこともあれば、的を射る場合もある。弓の弦を鳴らしたり、矢に音を出す鏑矢を用いることもある。³⁰⁾『遼史』刑法志には、穆宗のときの鳴鏑が載っている。

蓋其即位未久、惑女巫肖古之言、取人胆合延年藥、故殺人頗衆、後悟其詐、以鳴鏑叢射、騎踐殺之、

〔遼史〕卷六一、刑法志上

以上の事実から見れば、瑟瑟儀第一日目の射柳の目的は、十分に清祓厭禳と考えられるであろう。³¹⁾射柳で放たれた矢は祭場の穢れを清祓し、シャマンが神と交流するのを妨げる悪霊を厭禳した。と同時に、その矢はまた柳の水精の活動を害する悪霊をも追い払った。弓射にこうした意味があったことは、先学が論じたとおりでと思う。

契丹の坳地であったシラムレン、ラオハムレンから遼河に続く流域は、沙地と草原が交錯した、とくに柳の多い地域である。³²⁾そのため、契丹の弓射競技では、普段からその枝葉がごく一般的にとされていたであろう。ただその柳がどのような柳であったかは、よくは分からない。柳の木は非常に種類が多いからである。中国文献の中では、それらは柳や楊の文字で表され、柳というのは概してヤナギ属の細長い

葉を持った枝が垂れたものを指し、楊というのはハコヤナギ属の葉が大きくて枝が頑丈なものを指すというが、しかし楊柳とも称するよう
に、区別は必ずしも明確でない。しかも契丹の掘地には、暮春に柳絮
を飛ばすケシヨウヤナギの仲間もある。

樹種についてはともかく、柳はいずれも水気を好む樹木である。そ
して契丹はそうした柳の性質を熟知していたはずである。古代人の自
然崇拜観念からすれば、それは柳に水精が宿っているということにな
るのであろう。祈雨のための祭天で、清祓厭禳に射柳を選んだのは、そ
こに理由があったのであろう。

このように第一日の奠拜と射柳を本祭の準備儀式とし、二日間全体
を一つの祭天儀式と捉えれば、瑟瑟儀の各部分は、すべて無理なく理解
できると思う。

四 契丹の弓射好き

さて上述のとおり瑟瑟儀は全体で一つの祭天儀式であり、第一日目
の射柳は祭天儀式前祭の清祓厭禳と考えられるが、ただこれを断言す
るには、あと一つ問題がある。というのは『遼史』に瑟瑟儀を「射柳
祈雨」と記すものがあることである。「射柳祈雨」とは、「柳を射ると
いう方法で雨を降らせた」という意味であらう。そうすると瑟瑟儀の
中心は、一日目の射柳の部分であったというようにも見えてしまう。
『遼史』に見える瑟瑟儀ならびに瑟瑟儀と推定される記事を抜き出す
と、次のようにある。

1 天頭 三年六月己卯、行瑟瑟礼、

(卷三、太宗紀上)

- | | | | |
|----|----|---|------------|
| 2 | 天頭 | 四年五月癸巳、行瑟瑟儀礼、 | (同右) |
| 3 | 応曆 | 十二年五月庚午、以旱、命左右以水相沃、頃之、果雨、 | (卷六、穆宗紀上) |
| 4 | 応曆 | 十六年五月甲申、以歳旱、泛舟于池禱雨、不雨、捨舟立水
中而禱、俄頃乃雨、 | (卷七、穆宗紀下) |
| 5 | 応曆 | 十七年四月丙子、射柳祈雨、復以水沃羣臣、 | (同右) |
| 6 | 保寧 | 元年五月丙申朔、射柳祈雨、 | (卷八、景宗紀一) |
| 7 | | 七年四月辛亥、射柳祈雨、 | (同右) |
| 8 | 乾亨 | 二年四月庚辰、祈雨、 | (卷九、景宗紀下) |
| 9 | 統和 | 十六年四月己酉、祈雨、 | (卷一四、聖宗紀五) |
| 10 | 重熙 | 九年六月、射柳祈雨、 | (卷一八、興宗紀一) |
| 11 | 清寧 | 元年、皇帝射柳訖、詣風師壇、再拜、 | (卷四九、礼志一) |
| 12 | | 二年、蕭阿剌除東京留守、会行瑟瑟礼、入朝陳時政得失、 | (卷九〇、蕭阿剌伝) |
| 13 | 大康 | 六年五月庚寅、以旱禱雨、命左右以水相沃、俄而雨降、 | (卷二四、道宗紀四) |
| 14 | 乾統 | 八年六月丙申、射柳祈雨、 | (卷二七、天祚紀一) |
- このうち「射柳祈雨」とあるのは5、6、7、10、14の五条。これ
は記録全体の三分の一にもなる。ちなみに『遼史』国語解を見てみる
と、
- 瑟瑟礼、祈雨射柳之儀、遥輦蘇可汗制、
- (卷一一六、太宗紀の項)
- とあり、やはり「射柳祈雨」は瑟瑟儀のこととしている。これはどう
理解したらよいのだろうか

思うに、射柳が瑟瑟儀の中心であるかのように記録されたのは、射柳の儀が瑟瑟儀の中で大変盛んに行われたことによるものであろう。

つまり射柳は本来清祓のためのものであるが、ところが契丹は柳と水との関係を深く信じ、しかも射柳競技を非常に好んだから、そのため勢いここに力が入って、射れば射るほど雨が降りやすくなるとの念を強くしたのであろう。

瑟瑟儀第一日の射柳は皇帝から始まり、親王、宰相の順に行われた。ここを見れば射柳は儀礼的なものである。おそらく瑟瑟儀が始まったときは、これは厳かな儀式だったのであろう。

しかし射柳の進め方を見ると、莊重さがない。——競射場には射手と、柳の木に的となる標しを付ける者がいる。射手は矢を標しに的中させると、標しを付けた者の冠服をもらう。逆に矢を外すと、射手は冠服を渡さなければならぬ。そして弓射が終わると、敗者は勝者に酒を薦めて、冠服を返してもらう。——このように負けると冠服を脱がされ、勝者に酒を薦めなければならぬというところからは、娯楽性が感じられる。これでは清祓儀式というより娯楽競技といったほうがよい。

神事を娯楽に変えたのは、きつと契丹の弓射好きである。北方民族らにはみな、大きな集會を終えたと、そのあと様様な競技を楽しんだ。馬や駱駝の競走、角觥、馬上からボールを打ってゴールに入れる競技、⁸⁰そして弓射などである。契丹の記録にはこれらのうち弓射が目立つて多い。『金史』によれば、金朝も盛んに射柳大会を開いたが、それは遼から受け継いだものだという。

金因遼旧俗、以重五・中元・重九日行拜天之礼、……皇帝回輦至幄

次、更衣、行射柳・擊毬之戲、亦遼俗也、金因尚之、

(卷三五、礼志八)

また契丹の弓射が生んだ習俗は、中国にも入ったと云われている。⁸⁰ 祭儀に於いて、奉納娯楽部分が肥大化し肝心の宗教儀式が目立たなくなるのは、よくあることである。たとえば我が国各地の祭りを思い浮かべればよい。はじめは重要な神事であったものも、今では前夜祭ばかりが盛大になり、本祭は目立たない。祭といえ、前夜祭ばかりを意識する人が多い。

ところで契丹の祈雨法として、もう一つ触れておきたいものがある。沃水である。それは『遼史』穆宗紀に、

(応曆十二年) 五月庚午、以旱、命左右以水相沃、頃之、果雨、

(卷六、穆宗紀上)

とあり、また

(応曆十六年) 五月甲申、以歳旱、泛舟于池禱雨、不雨、捨舟立水

中而禱、俄頃乃雨、

(卷七、穆宗紀下)

とあるものである。すなわち契丹は、互いに水をかけ合えば、また水の中に身を浸せば雨が降ると信じていたのである。これはいわゆる類感呪術であつて、同様な行為は、世界中にある。『遼史』礼志に、瑟瑟儀のあと三日たつても雨が降らなければ、瑟瑟儀の祭司である敵烈麻都に水をかけたと言ひ、また穆宗紀に、

(応曆十七年四月) 丙子、射柳祈雨、復以水沃羣臣、

(同右)

と云うのも、皆同じ行為である。

こうした記録を見ると、契丹の祈雨には主として二つの方法があったと推察される。一つは、シャマニズム儀式によって天神や太陽神に雨を乞う形。これには整った儀式が必要であるため、とくに部族の首長クラスが行った。いわば公式の方法である。もう一つは水に直接触れたり、用いたりして雨を祈るもので、一種の俗信であり、普段民衆は、こちらの方法を行っていたと思われる。瑟瑟儀にはこの両方が盛り込まれているが、これはシャマニズムが様々な信仰を容認し、有用なものであれば何であれ吸収するという性格を持っていたためであろう。道宗はこの二つに加えて風師壇も祭った。風師壇の儀は言うまでもなく中国の祈雨儀式である。³⁴⁾

結 び

以上論じたところを要約すると、次のとおりである。

遼の瑟瑟儀は、契丹および他の民族の諸儀式と比較してみると、明らかにシャマニズムの祭天儀式の形式を持っている。第二日目、祭場に植えられた柳木は、祭天の祭壇、神位の一種に相違無く、祭東も、太陽崇拜に起源する祭天儀式である。つまり瑟瑟儀の中心はここであり、瑟瑟儀は天神や太陽神を祭って雨を乞う儀式であったと考えられる。

瑟瑟儀は二日かけて行われ、両日とも射柳すなわち柳木を射る儀があったため、まるで射柳によって雨を呼んだかのような観がある。しかし第一日目の射柳行為は祭天の儀よりも前位置にあり、また契丹が

弓射をよく厭禳の呪術として行っていた事実を考えると、これは本来祭天のための清祓であったと察せられる。第二日目の弓射は、言うまでもなく祭りの後の娯楽競技である。

ところが契丹は武技として極めて弓射を好んだことから、瑟瑟儀の射柳は次第に盛んになった。そして第一日目の射柳は、一見儀式の中心かと思われるほどになってしまった。遼代、瑟瑟儀が「射柳祈雨」と言う表現で記録されたのはこのためであろう。

最後に瑟瑟の意味について一言しておきたい。

清の『欽定遼史語解』はこれを満州語で解釈して、

色克色哩、満洲語、箭射物釘住也、

(卷一〇、名物)

と「箭で射て釘づけにする」の意にとった。島田氏は『欽定遼史語解』にしばしば強引な解釈があることを指摘して、この解釈を一蹴した。しかしそう無視することもないのではなからうか。弓射は瑟瑟儀の本質部分ではないが、これが儀式の中で盛んに行われたのは確かである。そうした所から、通称としてこの名が始まった可能性も無いとはいえない。

註

(1) 『遼史』卷四九、礼志一、吉儀

瑟瑟儀、若旱、扱吉日、行瑟瑟儀、以祈雨、前期、置百柱天棚、及期、皇帝致奠于先帝御容、乃射柳、皇帝再射、親王・宰執、以次各一射、中柳者、質誌柳者冠服、不中者、以冠服質之、不勝者、進飲於勝者、然後各歸其冠服、又翼日、植柳天棚之東南、巫以酒醴・黍稷薦植柳、祝之、皇帝・皇后、祭東方畢、

- 子弟射柳、皇族・国舅・羣臣与礼者、賜物有差、既三日雨、則賜敵烈麻都馬四疋・衣四襲、否、則以水沃之、道宗清寧元年、皇帝射柳訖、詣風師壇、再拜、瀧川政次郎「遼金の射柳祈雨俗」(『滿支史説史話』)所収、一九三九)
- (3) 島田正郎「契丹射柳攷」(『民族学研究』一五一、一九五〇)、『遼朝史の研究』所収、一九七九)、『遼史』(中国古典新書、一九七五)
- (4) 王承礼「契丹の瑟瑟儀和射柳」(『民族研究』一九八八—三)
- このほか黄清連「遼史「射鬼箭」初探—從宗教和法律觀點所作的分析—」(『史原』五、一九七六)も射柳について述べている。
- (5) 野上俊静「遼朝と仏教」(『大谷学報』一三—四、一九三三)、同「契丹人と仏教」(『仏教研究』七—四、一九四四)、ともに「遼金の仏教」(一九五三)所収。
- (6) 拙稿「遼祭山儀考」(『東海女子短期大学紀要』二六、二〇〇〇)
- (7) この石廟は先年大興安嶺の北部で発見された。米文平「鮮卑石室的発現与初步研究」(『文物』一九八一—二)
- (8) ハルヴァ「シヤマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—」田中克彦訳、(一九八九再刊)、第二章所引、アガピートフ・ハンガロフ「イルクーツク県のブリヤート人のシヤマニズム」(一八八三)など。
- (9) 拙稿「北方民族の諸儀式で行なわれた匝回について—魂の天への飛翔を示す中国史料—」(『東海女子短期大学紀要』二四、一九九八)
- (10) 島田正郎「遼制の研究」(一九五四)第二編第二章第四節一、皇帝親征儀
- (11) 『モンゴル秘史—チンギス・カン物語』村上正二訳注(一九七〇)による。但し二個所の「踊る」の語については、白鳥庫吉『音訳蒙元朝秘史』(一九四三)及び岩村忍『元朝秘史』(一九六三)を参考にしてこう改めた。
- (12) 拙稿「金代女真の信仰—祭天を中心として—」(『森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集』)所収、一九七九)
- (13) 白鳥庫吉「滿鮮に於ける竿木崇拜」(『史学雑誌』四七一、一九三三)、閻崇年「滿州神杆祀神考源」(『歴史檔案』一九九三—三)、石橋丑雄「北平の薩滿教に就て」(一九三三)
- (14) 註(9)参看
- (15) 赤松智城・秋葉隆「滿蒙の民族と宗教」(一九四一)など。
- (16) 松井等「契丹人の信仰」第二章、(『滿鮮地理歴史研究報告』八)所収、一九二二)
- 一)、前掲島田氏「遼制の研究」第二編第二章第二節五、拜日儀、前掲拙稿「遼祭山儀考」など。

- (17) 北魏は祭天儀式のとき百子帳とよばれる大テントを張った。百柱の天棚も、それと似たものでなからうか。
- (永明)十年、上遣司徒參軍蕭琛・范雲北使、宏西郊、即前祠天壇処也、宏与僞公卿、從二十余騎、戎服繞壇、宏一周、公卿七匝、謂之蹋壇、明日、復戎服、登壇祠天、宏又繞三匝、公卿七匝、謂之繞天、以繩相交絡、紐木枝棖、覆以青繒、形制平円、下容百人坐、謂之為繖、一云百子帳也、於此下宴息、次祠廟及布政明堂、皆引朝廷使人觀視、(『南齊書』卷五七、魏虜伝)
- (18) 清代女真帝室で行われたのは紫禁城や各家屋の東南位置であった(石橋丑雄「北平の薩滿教に就て」(一九三三))。またオロチョンの調査にも、シヤマニズム祭儀のときに祭場のテントを東南の方角に向け、あるいはテント外の東南すなわち太陽の昇る方向の所で太陽神を祭ったことが記録されている。(王宏剛・関小雲「オロチョン族のシヤーマン」黄強・高柳信夫等訳、一九九九)。東南が古来シヤマニズム儀式の重要な位置、方向であったのは確かである。自然界の中で東南という位置や方向が意識されるのは、冬至のころの日の出の位置をにおいて外には無いであろう。
- (19) 島田正郎「遼朝官制の研究—東洋法制史論集第一—」(一九七八)
- (20) 島田正郎「遼代における巫の地位について」(『史学雑誌』六五—一、一九五六)
- (21) 註(4)参看
- (22) 膨大かつ特殊な調査記録に直接あたることは難しいが、資料を収集整理し検討を加えた著名な書がいくつも邦訳されている。前掲ハルヴァ「シヤマニズム—アルタイ系諸民族の世界像—」田中克彦訳、エリアーデ「シヤーマニズム」堀一郎訳(一九七四)、ミハイロフスキー「シベリア、蒙古及び欧露の異民族間に於けるシヤーマン教」高橋勝之訳、(『シヤーマニズムの研究』)所収、一九七二)、佐々木宏幹「シヤーマニズム」(一九八〇)等々。
- (23) 北方諸民族の古いシヤマニズム儀式については、この註に掲げた幾つかの拙稿を参照されたい。
- (24) 註(6)参看
- (25) 『燕北録』は「遼史拾遺」卷一五、礼志一、柴册儀の条にも引かれているが、文に若干の異同がある
- (26) 瀧川政次郎「遼の奇刑「射鬼箭」考」(『滿支史説史話』)所収、一九三九)、前掲黄氏「遼史「射鬼箭」初探」

- (27) 馮家昇『遼史初校』は「問」を「聞」に改めるが、問訊の意にとれば、文意は通じる。
- (28) 江上波夫「鳴鏑考」(『ユウラシア北方文化の研究』所収、一九五二)
- (29) 朱子方氏は遼シヤマンの法器である鈴と箭が中京址から出土しているという(『遼代的薩滿教』、『社会学輯刊』一九八六―六)。
- (30) 徐化成『中国大興安嶺森林』(一九九八)、中国地図出版社編『中国自然地理図集(第二版)』(一九九八)、『大百科事典』(一九八五、平凡社)および『世界大百科事典』(一九八八、平凡社)のヤナギの項。
- (31) 瀧川政次郎「日渤海の競技」(『滿支史説話』所収、一九三九)
- (32) 松井等「契丹人の衣食住」第一章、『滿鮮地理歴史研究報告』九所収、一九二二、前掲王氏「契丹的瑟瑟儀和射柳」
- (33) 黄震雲氏は『全遼文』巻九の「孔水銘」をもとにして、遼代の祈雨の方法に、唐に行なわれた龍を崇敬する形のあったことを述べている(『論遼代宗教文化』、『民族研究』一九九六―二)。
- (34) 前掲島田氏『遼制の研究』第二編第二部第二章第二節八、祀風師